

孤高の持続

死と対峙するアン・チャンホン

2010.5.31
ソウル近郊



一〇〇二年の釜山ビエンナーレで、人物写真を数十枚も並べた鮮烈な作品があった。写真は手描きで修正されており、みな眼をつぶっている。眠っているとは思えない。内省か、強制か、あるいは死か。黄色は写真の退色か、黄泉の色か。——たぶんこれがアン・チャンホンの作品との出会いである。以後も、蛍光色のようなドギツイ色彩と、暴力や死と向き合うテンションの高さで、彼の作品を見かけるたびに記憶に焼きつ

を開催したときアン作品をポスターに使ったのは(五七頁参照)、誰もが認めるそのインパクトのゆえだ。

二〇一〇年五月、アン・チャンホンにこの作品について話を聞かため、稲葉真以の協力で、ソウルから電車で一時間くらいのスタジオを訪問した。この地域に住む男女をモノクロームで全裸姿に描いた大作絵画と、その展開である制作中のシリーズがあった。性器むき出しのだらしない姿、人に見られたくないようなポーズで、床に絵具の跡がある散ら

かったアトリエもそのまま描き込んだ人物像は、等身大を超えるミニチュメンタルなサイズともあいまって、嫌悪感をもよおさせるどころか、侵しがたい崇高さをたたえていた。壁には、青ざめた青年と、横に寄り添って男のスボンの中に手をつ突っ込んでいる若い女性を描いた作品『モデルのように演じ三』があった。小ぶりの画面、わいせつなイメージでも、物おじしない眼差しと切りつめた造形は一瞬で記憶に焼きつく。

このほかの作品でも、性、暴力、死、さら

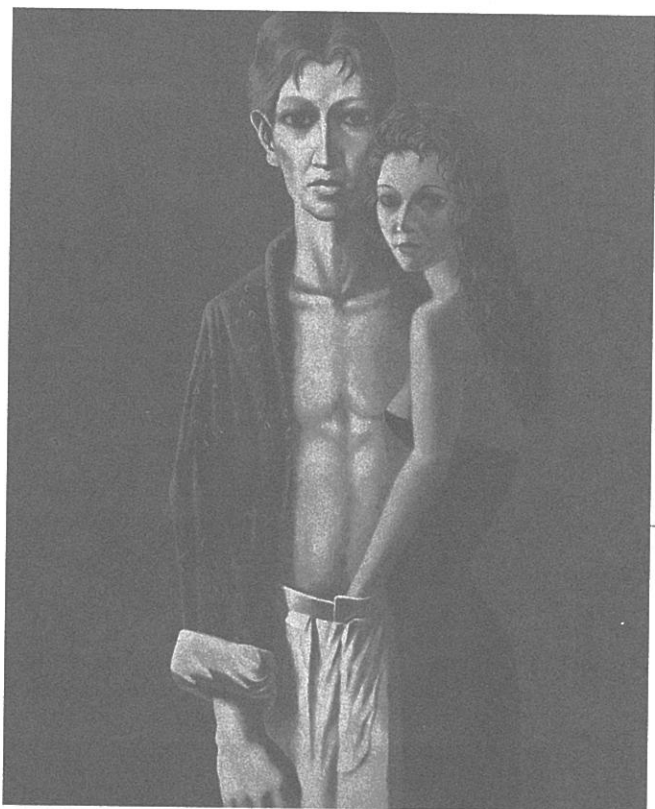
に排便にいたるまで、イメージが忌まわしければ忌まわしいほど、それらを正面から見据える作家の精神の強度。こんな激辛作品は全アジアでも貴重であり、大規模なインスタ

レーションよりも、大金を投じた映像作品よりもはるかに、法も常識も超えて私たちの精神を変革する。

写真を使った作品では、つぶれた写真館から入手した無名人々の家族写真、卒業記念写真などを切り裂いてつないだり、亡霊のような顔にしたり、

蝶やハエをたからせたり、先人への敬意と死者への追悼や感傷を徹底的に否定する。手描きで眼を閉じさせたり、逆に大きく見開いたり(生者というよりロボットの眼だ、生と死の転換を自在にもてあそぶ。金持ちの着飾った女性たちも、やはりグロテスクでおぞましいものに変えてしまう。

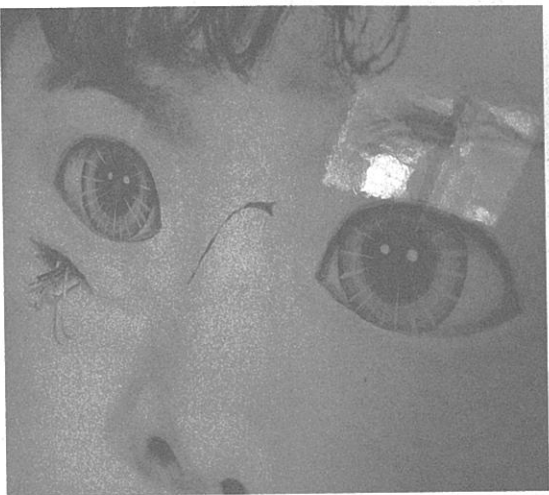
歴史的に言えば、一九五二年生まれのアン・チャンホンは八〇年代に高揚した民衆美術の世代であり(民衆美術で「コラージュ」を始めたのは彼だそうだ、同時期に釜山で起こった「形



アン・チャンホン『モデルのように演じ3』1991年 | 個人蔵 | Courtesy of Ahn Changhong and Gallery Skape

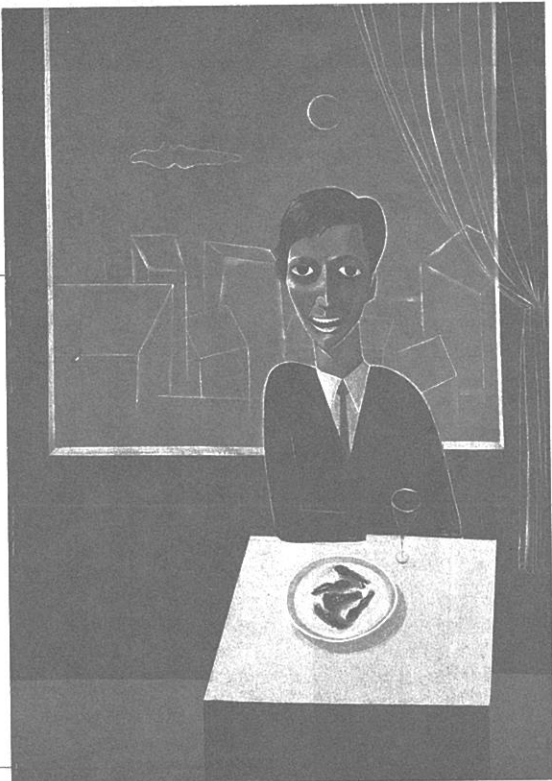
アトリエのアン・チャンホン





手彩色作品『サイボーグ』2006年
部分

アン・チャンホン『無題』1976年 |
Courtesy of Ahn Changhong and
Gallery Skape



象美術」の一翼を担った。一見して不穏な作品なのでアンは安全企画部から監視されていたが、実のところ彼の作品には時事的な主題や特定のメッセージを訴えるものが皆無であるため、作品が押収されたり作家が拘留されることはなかった。彼の作品が目前の政治問

題よりも、家出をしたり労働者として過ごした青少年期の経験から見出された、人間の本質的な悲劇性やアイロニーを伝えていたからだろう。
二年後にソウルのギャラリーで、『モデルのように演じ三』に再会した。翌年に同じギャラリーを訪ねたときにはその作品は売れており、二十四歳のときに描いた『無題』が

掛かっていた。一人でワインを飲むスリッ姿のモダンボーイがつまみにしているのは、ひからびたカエル(本物が貼っつけてある)である。いくらモダンなスタイルを装っても、絶対にモダンにならない人間。四十年近くあとの時代を生きる私たちも、依然として？

八面六臂

キム・グリムの実験

キム・グリム(Kim Gulin)の驚くべき多彩な実験の軌跡を知ったのは、キム・ミギョン(Kim Miyoung)の本『韓国の実験美術』(二〇〇三年)からである。そこではアン・フォルメルから単色絵画、もの派傾向など、日本でも知られた韓国美術の「主流」からは

ずれた、いわば「反芸術」的な傾向——一九六〇年代末から噴出したポップ、オブジェ、パフォーマンス、コンセプチュアル、アースワークなどの実験の流れこそが、各時代の社会と密接にかかわる実践として評価された。

韓国史上最初の前衛映画とされるキム・グリムの『1/24秒の意味』(一九六八年)が大阪府立現代美術センターにあることを知ったのも同書からである。さっそく見せてもらい、のちに大阪のギャラリーが持っていたビデオをアジ美で収蔵することができた。

この作品は、ソウル・清溪川の高架道路から始まり、一秒ずつランダムに都市風景やディテールを撮ったショットをつなげたもので、都心の喧騒と活気を表わす半面、モノクロとカラーの混合やネガポジ反転などが作り

2010.5.30,
13.8.16
ソウルおよび近郊



手の焦燥を露呈している。チョン・チャンスン(Chung Chanseung 一九六七年に韓国美術史上初のパフォーマンスを行なった作家の一人があくびをし、白い液体を吐く場面は、「漢江の奇跡」のなかで成長した都市の現実に対する作家の拒否感を示しているようだ。

キム・グリムがその旺盛な実験精神を全開にしたのは、この映画制作以後である。一九六九年十月、キム・チャソプ(Kim Chasup)とともに百人にインストラクション入りの封筒を発送(韓国初のメール・アート)。翌七〇年四